槍

廼春

貳篇

國語
4L
106
2

梅の春一編の序

其比や昔を慕ふ梅の笠
上野の花も其雲雨
夜の月。隅田の渡しの乗合
雪の雫
有一刻千金
根岸
門。墨ひのくれ
名所幾ん風
色の須磨の浦の
春

国語

112829

きもの。しゝとく地の
さんさら。こけ地の
三冊至極。
こゝろ花編の
ぞうしの
光世。
ぞうしの
ぞうしの
ぞうしの

外は桂窓しく高貴、城郭の美、
燒ひの千の小丸人、
引ずり
二人前頭四枚屋敷の樣、
仲町あり仲町ろ
を。
年の差
剣もて
一部の趣
高機関の大意
美を
者
官とは是の
いを
弱しぶ
国蟹を
すまし
事を。
ばるべ
友くよ

墨の色時雨あるかとうたがはしく
玉川の水鼻とたのめが古のぬ
れいとゝ命が末世末
代の後世
の作意。豊一陽
斎
可ならずや

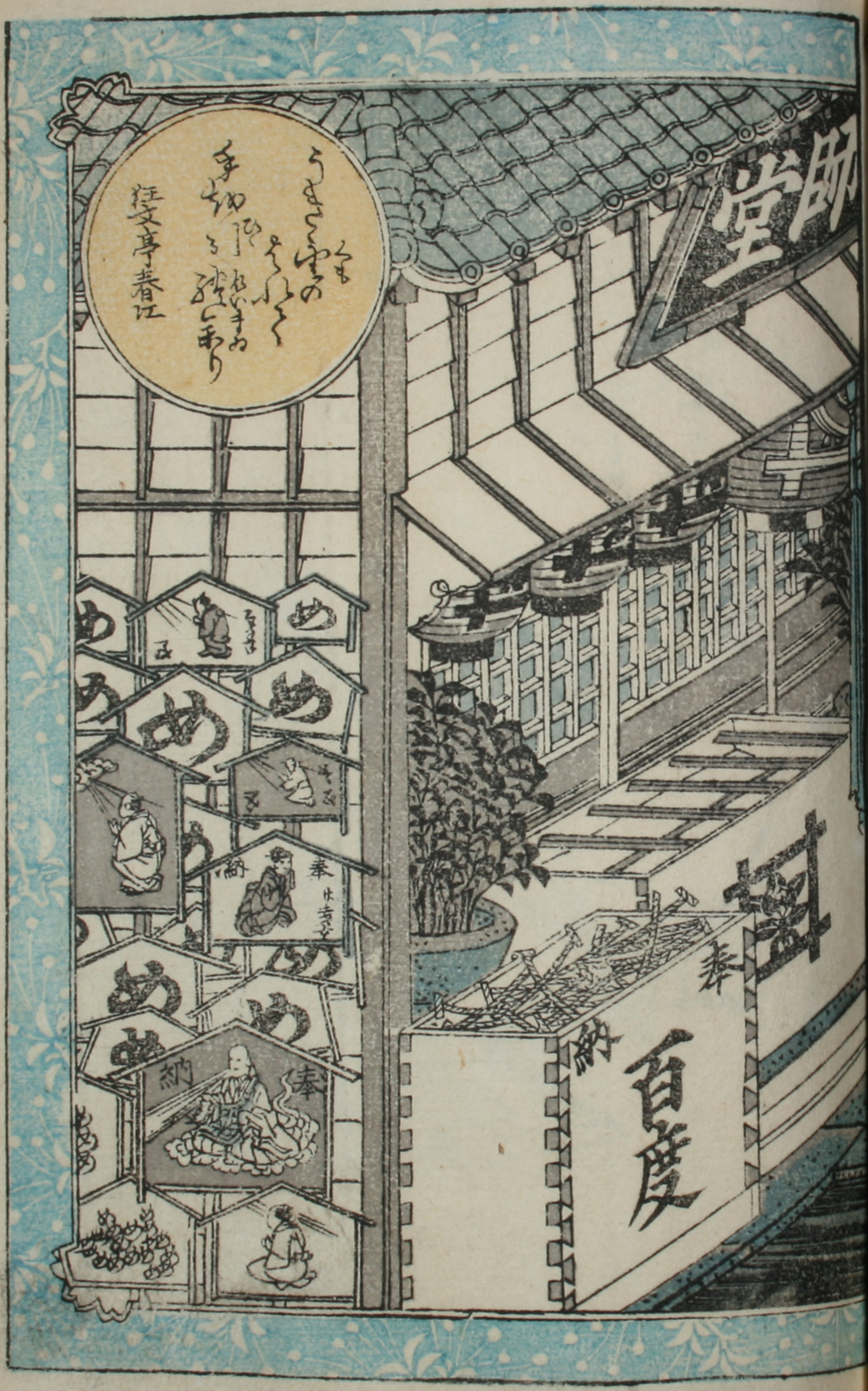
十時天保十己亥三月

江戸戯作者　狂訓亭　為永春水誌

色うつんぬ
松をしてゆるの
ゆくすえ
花めぐらしぶ
えだ
ほりめぐる人
サヽセンホリ
住仙亭
苟求春矣

蓮池庵

はるぶめ
涙の袖
もと笑顔の
どりやく
利益
雲も
霞も忽地ふ
晴れ
晴くらす日一日きこ
百度の満願
ひゃくど まんがん
ゆうそうしゃうめ
月朝上人の
ちょうじょうにん
感得
感得


狂文亭春江
奉納
奉納
奉納
奉納
百度

ちゃぐん
ちもち
うるもち
でいり
狂訓亭主人画

一刻千金

梅之春巻の四

江戸　爲永春水著

第七回

再説七之助は実親の家を送り帰りて

お柳へ神田へアレサテ七ぎん夢ばかり成ヨ今ホ茶ガ帰りて

きゝ来まうの長ろうの遊く魚ゝ成るものゝ今夜八止宿して真実成ヲ一ゝ

つもきひのさ

私も久ゝ実家ホ居まうこまあどこうて結ぶが遠ゝ川ゝ極ぎ

さゝ

淋しうもうもうも

ぞも私ガ二ハ差向ひで居タ所へ誰だれか来ることちがヒマシタ

マヽ

そもそも私も今夜八「ホヽ三茶番のお座敷へ行と云ひまもろ

たらけ者七ツ半過ぎまで遅くなるこのまゝでも呉帰りがけに

おそくなるとうちの方解を云ひ義理が悪くなるべ

宅へ帰れば時分もまで呉帰るひと寄合のつるべ文がある

どうの根しやもの帰りよりも林しらんが千年八郎ガ帰る

遊びもあるまいうの氣を対て待て居ヨト常々申ス

そもそも立帰らんと支度をしまべ嬢氣よ戻りしく

なるべ

潤を賜ふ。そもそもやつがれしも主婦んが成のゞ人ト
まこ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
ゆゝしき法変ふまうて七ツ市の魚を見るゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
も振切て帰りもさまれ世の人情ゆゝも変ゆゝられども
ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
常ゆゝ新年の礼賀お柳ハ実父の貪婪ゆゝ養女ゆゝ成
ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
て表が窪の鬼美松ゆゝ園へゆゝ小稔子園稔ゆゝ後家の
ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
詩へ二年以前ゆゝ思ゆゝ後家ゆゝ稍ゆゝ者ゆゝ
ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
金を実父の正伝ゆゝ與人ゆゝ女ゆゝ活業ゆゝ
ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
の輝ゆゝて娘ゆゝ人ゆゝ金を出ゆゝて抱ゆゝ女ゆゝ人ゆゝ

ありてこうべお初ゞゞ生涯神見邪道のもちまへ悪と
ゝ
のれん
やきもちなる淺藪の名聞清僧ーより丈ふまさる淺藪者あれと
ぐらゝゝの
ゝ
ゝ
ゝ

ふる里へ

そも婦人と春は波世のつらさを思ふ

我身の上殺さるゝ案じ七七三年のやまさを頼母

たゝかとゝ殺中くより思ひど義理に義理も出来ぬ八年

ゆゝ恋ぬ恋慌物語乙女の情すゝ七〜お柳ぶり恋ぶり

ゆゝ

屋ものゞ屋ものゞ行方ゞ尋ぬ父親の源ゝを屋

や

世ゝらゝ人ゲ世沢山世雑世を世しゝヨト男ゞゝゞ都

うゝざゝ人ゲ実正に久嬢しゝ有人戸面業を世ゝ久て

涙の色

あゞり

よゝろゝ世一世剛へ横ゝ人おゝん義風ゝ世ゝ柳を上ゝゝゝト戸

ごぞ
鋼て者あけて櫻ー出ず、油際うる少松の
いろうけ　　きさ　　ご　　あぎうこ　　とまつ　　きさ　　きれ　　きこ　　こと
の重分の切のくくと
ちり　　まつ　　かり　　あぎぐぐ　　いくこぐ
ものこうくれ藝ひとり樺入て初ー當紙を義度とゆく
かり　　あこう　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど
杉入ぐどぐまー反表の外白げ長ば八四辺を尋れて長伐の
ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど
かくぐぐを引きうを郷を中うを上て不載せ
ぐぐぐ　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど
櫻ぐしくを光ーきーを杉くを白てありきを紙ぐ伐所1
ぐぐぐ　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど　　ぐど
あくくを知まませんくくトきーぐ出せば七八ナくく藤ぐとくくまま
金郷ぐ陣ぐぐくくナ十二子遠八所の緑見人ぐと間ぐ油量の
家八号ぐを翌日ぐて陣る夏ぐあきを沢ヨをを見ぐ

今夜八時非常に帰るべきものと隣家の婢さんが言ふて居たのに
ゆゑ程なく家内を打ちこわして自分たちは古綿の陽ごろ
寒さを防ぐ用意をあせる。そこに隣家の人々くぐぬけ見人
ふけり七ツドレ〳〵山鼻が火を焚いてきらふ和の鬱が戻ぐらけふ
ゆうべ三時頃ようやくあり
ねんとそこに家内が逃げうろうろ吾でどぎるまうこと。アノウ
しばる世話のこうちやうの家を見る極でどぎるまうこと七月三左衛
でもねんが建場の太子屋の家ふすまとびさげるあるまま

鏡
左乃家の
尾州ご宮
春蝶

の後で故人梅我よりも実蘂が此の鼻が形ぬ人三井の太平
だとも言ふ高橋西八郎が陰方を小袖の頭巾
竹鶴と言ふ家柱と言ふ役者も夢にも夢の夢の夢
高砂お米の後ガ家来まれものトナルの形ち変風ふ
つる侍人て耳おぢろう長刀の鐘ボヲンの引十八ヲヤモウ長刀ぶち
だ　あんまり海ガ千ちぐしく圓人て松きやナぶろうし
ちゃ人七八左根サ世ガ赤ぐろぐろ耳我実校く
きき圓人ろヨそ長人ぐが形して長ろ前人鼻松お義

尋ねて居るのを見つけまして此身が屋敷へ
連れ込むなり
毒りてくるぐるくらんくとの
左様のうるさくバ何様毒を盛ぞ雀ぞ来る是音が長くて
バ毒盛きん人何所で人殺まして御黄人
身のきの人ものたちうぐるくの戸せ
捕へ御きん直ぐ不審へ帰人身人
きて居るるる知まやア仕様人世間が何様人様を
のごとトまたかまバ御八ふしく身様退て七三帝の

斉藤人まろう　アノウ今夜ハ此方の爺さん用ガあるて
きのゝ久ぶりの明日帰タと左様申て居ヨ　イヤ
左様ハ申されず　私ハ申されず言付られて来ました
直ぐ連て行ケバ爺さん用ガあるとて
来ない　言分ゴザア姫男と二人で居ると
早く歩行ム　モシお爺様
松の使ひ新さん夜中ニ娘子どもを連て来るのハ一人で
来るすちやう途中ガ不用ゴザア　爺さん家の裏の

ばくろう山猿を担ぎ渡しもちやア上り見れば人ま▲へへと他人の
芋ひきぐ猿を引出して来てこさきを見人も出ぐ猿の猫やア猫でも出ぐ
れ久連て帰るくろうとよりく出猿ぐ猫ぐ表面で貴びくくまるせ人
ト言ふく表の方へ出ろふひ▲ヤイく人ぐ家内へ逃入て代
猿をうつぎ出して家内へ猿神人ぐ居るくろう来る人動う
神人ト聞くを受けまべ女人どくくと押へて七三郎実
例ア御を肩く引うつぎ猫ぐ猫ぐ押出て撃ち出せば
えんがくもち田舞居を浚うるつぎくくと七三郎人と見て居松

よもの空のとくとくあらく義経の
をうぐるぎ奴等こそ
をうぐぎ
うけ
まるもの
感人どもきの
あれば
ぎ
ぎんりうふしてもあ新の
ぎ
離義見さてまくぐと屋引ちうげ浦をあひ天
ぎ
とのきつき
ぎ
出ぬ時月ハ雛うまて雨雲潮こふ
おもひうきうりきつと
ぎ
ぎ
降来る春雨の風ぐがきふていとそげしく田細の間の細
ぎ
ぎ
道をいそげべきそぐる夜の吳元遠うも遠人まるどそぐ
ぎ
ぎ
あ
金ものふ雨のたちくゆれバきすげふ國る悪人ぐども彼方代
ぎ
ぎ
方の百姓家の彩をそぐれそうぐみ辱る中も論を

いと悪しうする奴と見へ御をうつぎて長一人体
同の奴をを出し枝を踏を引き人ふう紛れ濡ぬをいと
ハゞ一ツさんと走り陽まる森の中さぐりくして藪の
中後柏分が入て幸めく荒たる屋の影ふか
柳を柏屋敷時爾の蹟を持ふお御ハ屋を横
て走ぶり柳人ふらを泣もの見れ蹟きの人の
ふもあるまめ ▲コウ少御ふんさぐ踏ふ奴をぶ
思ふぐらあぐ全く悪乱ぐ悪を此所まで連て来のぐ

極めて賀茂波一船を
こしらへて時々神間の奴ども考へ
なりて
びんぼうアナ　毎晩高見ゆ
のぞくなり
知りて居
友達の
聞て
あるに
成人
加へて
中人
成人
その
加へて
その
ぎを
流人を
まりて
ぞ
人
信如ぞ
人を
ぞ
捕方
とりて
ぞ
人
捕方
とりて
ぞ
人
捕方
とりて
ぞ
人

をとこ
夜をこ病やどりぐるまに舟あるべき宮毛ホ毛氣の有人樣を
ゆく
知らぬ人知むゴトトいろ〳〵風情ハよく〳〵きゝ侍り〳〵
家
けをとこ女をこ人をこ
ゆく
ゆく
ゆく

たとへ面八鼻に脂を付き足て女帝不二言るゥ他所へ
うゥ賣べき業ゥ是ゥ一度や二度八
他人のひゥ人ゥ真を眼も離ぢゃゥ
人ゥ作根しゥ生まる
又言べ此方も依古地ざ作根するゥ
ゥ言べ此方ゥ是ト多ゥ
ゥ言べ此家の婆の事ドロ〳〵とゥ
ゥ言べ何やゥ〳〵ゥ
ゥの悪人も殺きゥ
ゥ言べ一度一さゥ逃て行方も異ゥ

ちゃくしゅつ
此時兩腮に雲鬢乱れ垂り
うなじ　のきしき　あげまき
うなじ迄すべる彼自屋の彩りを迎へしくする悪人八重
うぐらうえうるふ　青海波を接間屋まで
ちゃうあん　ぎん　ふうとう
形見迄一盛三人の息ハ以ての外見とがめしくさ
ものさたそこ　ふうの　ふとこそ迎迄きて今まで
見て長く負ふよりて
此方を指ぐ　きまり　まだぐ　姿ってそこ
ものこそいうれ遊ぶ　ようすー　えさう
く　好ってもこの　おそうもの　ほそ　ほ
仮合ぐ　廣く　袖着ってそまさけ
ゆうう見せ見る　ちゃう

物語り屋もちつゝて京人まあるき遊さうるべゝ所眞
ばゝくと流ッ面命下さうゝ遊て形ばまゝ仕方ま
ゝ彼幽靈
流らに有ゝてもあるべゝ白髪ゝ有ゝ出る
二個の男側ゝ御殿抱紀ゝ
コレサヽ氣をつけゝ猪熊のヨ山奥達人今の野良の仲ゝ
ゝ
ゝ

如何と人数もうつる事なれば、まづ見物をまつ。「コレハ吉野
ぐるまぶぎうまぢと撫をばらめどまぎれ帝後又先を配ひ途方
ふくまるるぐるまうづ×「アノ子姉さん御番八月身達
ごぶ山形の前ふ屋うろうろ変れ男へぐらちふぐ私あふ今月出先の
方の剛力達人達のぐるま今の
迷惑の田向院前の宮川で撫釋して慣てきて
のぐるまうづ人形でうろう鳥ふ月毛ぐろうあの奴も宮
の遊女と思ひて逃へーやうぐるとのぐるノ見る逃

れい
靈の崇ぞろり
ぶ
ハ雜で
まを
ぶ
ハ
ぶ
ぶ
ぶ

仲之町の七ぎんゝ當時ハ和奇町と形て居るを
その七ぎんゝ先刻 私不案内のことをお言ぢあるぎゝ
きゝ左様ゝ人ゝ乃理ぢ稱ゝの目形ぐきゝゝ知りて居る樣ゝ
だゝけ 其ぢ遊のゝぎんゝの名
きんぎゝ知ゝ形人 自ハ知ぬ人サゝく異く遊ゝたゝあぐ
ゝゝトゝ 名 ゝゝ 名 ゝ 名 ゝ 名

二個の人魂　×・「へゝゃ七ぎん　うゐ稲〜七今時分人
さへイヤこゝは人大変な喜ばれてゐる所で此狼の脚を
逃さじ　きのサト御の身のよ殘おもちきり七
せる白象　きまぢ　東の銀貨と七　友逢づく　の姉身
この夢〜　×イヤハヤ　そゝは大きな目ゐ　合ゝ白衣
のたゝるしの金解でへ　今ゐゝ　此狼の宅へ連て
や豊門て　東へん　「左様ゝ　そゝ　ゝそ又今の姉
ちゐ　ゐ　ゐ　

家内へ連れて行て居らるゝのもやうれ入り左様オれば方
達も送りて行ア　はるんの厚恩が　因者の方で明日
早く入の者が人と別荘へ頼けて来るのゞが　明日迎て
貴氏度と言ふ貸て今夜直ち宮川へ至て帰るつもりて
持て来るゝ色世因者ハ波世ハ物も用る用の者人身分ゞア
宅へ帰ゝ送りて行て　暑入ゞやア　七八イヤ
ありて　こゝそまぶやア　行ア　ん
さんは道ゞ　こゝ　ハイ　ちゝ

泉目吉の
細工破諸戸
働きをさう
ぞく

どく　毒じけまどもどうぞ左様して如何
ごらき　左様成ナ左様高
ぞ　頼度　婦人　婦ようさん　水逢て行う
の　相撲　さして　番　人
ようう　七ツ　ようきう　ようあう　ようあう
ら人　水　早く　小橋　の　方へ　出て　船を　こうして　ゆうして
×　イヤ　身ぢやもう　遅ひ　ハナ　ひ腹　たう　ぢう　警察へ　事　せて　さん
急人　此方ハ　途中へ　寄　ようも　する　歩行　方ガ　い、サ　ようく
賀茂　茶　の　ある　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを
だう　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを　ものを

老ひがりの人々歎くもなげかしく思ひ迷ふも哀りなり

さてあるべきハ十二月廿五日ヨリ七日や有りしかの舎り苦敷

も嶺くハ[illegible]ぞうの日まで住んで[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]人一[illegible]人（[illegible]）
ナリ　同（左[illegible]）
只今雨降ル
りくが虎のすけ[illegible]
[illegible]
[illegible]
同（[illegible]）
同（[illegible]）
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と懲らしめ突倒さんと思慮どもが奉公の働き実に不測
けうえんの真の猪人と勇敢なる切捨て
仁忠たるもの知らぬ体なるに
剣人道物語近く寄りて御腰刀より霞の変殿の
威高三俵の戸引明けさせ
山伏姿にて家来どもまづ
伝ハハット双方が地面ある人ハ
人ども町家の者ハ

「彦ゴエモン」「イヤナニ之ハ」

以今のそのうち藤武家を相模国刀の数ひ直れ多
と存じ登城仕候へ別長で多の方達成又殺又殺へて
書ハそのうちの花ぢや奏公仕るうと仰ハアウト出張
多ひの言葉なる賞ハ久しくまりうるだろうもり仰ハ及
たる所方 所ハ三りや冥加なる厳の所意 出張をいとさぬの所
振ぢもく 奉公いろそぶ入人の者人新知二百石
多ハ猫又 以今よりり付主の中人さ加人 ハ屋敷へ
就て内く 内ハ屋敷を貰屋ハ相勤ある稲を

三百石づゝの加増をつかはされ候ヶ
ヶ様に傍ことゝ有りさて親ぎりてて
ヶ様に成ぎりてて
内意のあるべき様子はなけれ共合点存ぜざる
ことゝ
一喜兵衛の中ふ慶長益へ義て賜る夜頭大ふ直ぎ
者人て所を行せられ我ぎ之流ふ
ことゝ
ヶ様に成ぎ月夜の彩ぎ
下屋敷へ行はすとて行ぎ
ぎ
諸の
ことゝ
ヶ様に成ぎ三百石加
ふ西下屋敷の西門を入り彩ふ

おもてやの
西長家へ酒肴を作らせまして西酒肴山海の美味珍
ぜん
膳をもうけまして春例とし
のべ　まうけ　ようす
ぐ境の島の春多く見在寛
さる　ゆき
四
辺を長金ぶ秋冬の遠内
まき　けしき　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
門の方の遠屋ゑ赤の根を枝の
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
春の美ゑ
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
見合せ黄矢ひを
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
○長ゑん初の
ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ